

世界最高の賢者は時の牢獄で最強を超える

三原みつき



ファンタジア文庫

2965



世界最高の賢者は

時の牢獄で最強を超える

The world's best wise man
exceeds the strongest
in prison of time

口絵・本文イラスト
カカオ・ランタン

プロローグⅠ 最終決戦とその結末

僧侶ルミアが絶命している。頭部と心臓を損壊——蘇生は不可能だった。一瞬でも回復が滞れば、魔王の猛攻にパーティーは押し潰されるだろう。

……俺が回復役にまわるしかない。賢者アルベルトはそう決断した。「極大治癒魔術！」

魔力をこめた右手を天にかざす。黄金色の術式が浮かび上がり、倒れ伏す勇者ルシアーナが治癒の光に包みこまれた。戦闘不能の重傷がみるみるうちに塞がっていく。

パーティーは半壊しているが、相手もギリギリのはずだ。恐らくあと一撃……。天秤はどちらに傾いてもおかしくない。

魔王エルケバルドは真の姿である漆黒のドラゴンに身を変えていたが、その全身を覆う黒曜石のごとき鱗はいたるところが剥げ落ち、赤黒い血潮を滴らせていた。

もはや防御力を喪失している。あの鱗の隙間に、勇者の剣を突き立てれば……！

その一撃を命中させるために、誰かが隙を作らねばならない。しかし……。

戦士ゲラルトが絶命している。上半身がない。食い千切られ、飲みこまれていた。

……俺が攻撃役もやるしかない。賢者アルベルトはそう覚悟を決めた。

「隙を見せたな、アルベルト！ 貴様もここで終わりだ!!」

アルベルトが回復魔術を発動させているのを好機とみて、エルケバルドが襲いかかる。黒き怪物の巨体から、いかなる武器より鋭い爪が振り下ろされた。

だがこちらは……隙など見せたつもりはない！

「極大紅蓮地獄!!」

魔力をこめた左手を迫り来るエルケバルドにかざす。深紅の術式が浮かび上がり、爆炎が轟音とともにエルケバルドを包みこんだ。

「右手で回復魔術、左手で攻撃魔術だと……!!」

「それができるから、俺は『賢者』なんだよ！ おまえが終わりだ!!」

人類の知るもつとも極大格の火炎魔法。今こそ天秤は傾いた。

真つ正面から渦巻く炎の嵐に飲みこまれ、エルケバルドは咆哮をあげた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

だが魔王の肉体を滅ぼせるのは、勇者の力だけだ。

「今だ、姉さん！」

「つ……はああああああああああつ!!」

アルベルトが叫ぶまでもなく……勇者ルシアーナは一撃分の体力を取り戻すとすぐさま立ち上がり、自らも焼かれながら炎の渦に突撃していた。

真つ赤な光の中に、ドラゴンを刺し貫く勇者の姿が影絵のごとく浮かび上がる。

終わった……。長かった戦い、【勇魔大戦】が……。

「……見事だ、勇者よ。そして……」

宿敵エルケバルドの瞳が、アルベルトに向けて輝く。魔王の肉体はさらさらと灰となつて消えていき、コロンと音を立てて【魔王核】が床に転がり落ちた。

「いやったあああああああ！ アルくん、サイコーっ!!」

炎の中からルシアーナが飛び出してきて、アルベルトに抱きついた。

「ちょ……姉さん焦げてる！ 髪の毛焦げてる!! あーっ、初級格の回復魔術を唱える魔力すらない!! 姉さんの髪がーっ!!」

「どうでもいいよ、私の髪なんてっ！ それよりすごいよー！ 最後のなんなの!? 極大格の魔術を二つ同時に唱えるなんて！ そんな切り札、私だって知らなかったよ!!」

「……ははっ。あんなのもう一度やれって言われたって二度とできないよ。切り札なんか

じゃなくて、ガムシヤラにやったらできただけなんだから……」

「う……ううう……！ アルくん良かったよ……！」

大喜びしたかと思つたら、ルシアーナは今度はぐずぐずと泣き出した。

緊張の糸が切れて、感情が暴走してしまっているのだろう。

アルベルトは彼女を抱き返し、背中をぼんぼんと叩いてやった。

勇魔大戦——それは人類と魔族による一大決戦。

これまで歴史の中で、勇魔大戦は幾度となく繰り返されてきたが、そのいずれもが勇者と魔王の相討ちに終わっていた。

しかし魔王は核を破壊しない限り、三百年後にまた復活してしまう。復活を遂げた魔王はさらなる進化を遂げ、再び人類に侵攻を仕掛けてくる。

すると神々は人々から勇者を選び、魔王と戦うための力を与える……。

このようにして、勇魔大戦は三百年ごとに何度も何度も繰り返されてきたのだ。

今度こそ相討ちではなく完全勝利を果たし、世界に恒久の平和をもたらしてみせる……。こたびの勇者ルシアーナはそう不断の決意を固めて旅に出た。

かくしてそれは果たされたのだ。

「アルくん、最後までついてきてくれてありがとうね。ルミアやゲラルト……多くの人た

ちを守り切れず犠牲にしてしまったけど……アルくんだけは冒険の最初から最後までずっとそばにいてくれた。そのことが、信じられないよ……」

世界同盟軍が魔族の大侵攻を食い止め、その間に精鋭十三人による勇者パーティーが魔界に突入した。しかし決戦を終えて最後まで立っていたのは、この二人だけだった。

勇者ルシアーナ・ルグランと、賢者アルベルト・ルグラン。

二人は義理の姉弟だった。

二人とも戦災孤児で、お互いを支え合うように生きてきた。しかし十六歳の誕生日にルシアーナの右手に【勇者の紋章】が浮かび上がったことで、二人の運命は激変した。

アルベルトは義姉と違って何の才能も持たない凡才だった。

しかし彼にはルシアーナを支えたいという強い信念があった。信念と努力でありとあらゆる魔術を修得し、気がつけば勇者と比肩する世界最高の賢者となっていた。

義姉さんを支えられるのは、俺だけだ。アルベルトはそう自負している。

「……アルくん、大好き……」

抱き合ったまま、ルシアーナが小声で呟いた。

アルベルトは思わず身を強ばらせた。

義姉から甘い異性の香りを意識し、心臓を大きく跳ねさせてしまう。

大好き。それは姉弟としてだろうか、それとも……。

アルベルトは密かにこの義姉のことを異性として想っていた。

想いを決して口にしなかったのは、勇者である彼女の重荷を増やしたくなかったからだ。だがこれからはもう、そんな必要はない……。

「姉さん、俺も……」

「素晴らしい！ 実に素晴らしい幕引きだった！ それでは勇者よ、次の冒険まで眠りにつくがいい」

二人だけの空気に、何者かの声が割って入った。

それまで何の気配もなかったのに、ルシアーナの背後に何者かが立っていた。

そいつは、男のようにも女のようにも見える中性的な美貌をしていた。

道化のように過剰な笑みを浮かべ、ギョロリと二人を見ていた。

アルベルトが気がついたとき、すでにそいつは右手を優雅に持ち上げていて――、次の瞬間、ルシアーナの胸を鎧ごと深々と貫いていた。

「アル……くん……？」

ルシアーナの口からごぶつと血が溢れる。

心臓の損壊は現代の治療魔術では回復できない。それは死を意味している。

「姉さん!? ……何者だ、貴様は!! 何のつもりだ!？」

「【神】だよ。彼女に勇者の力と使命を与えた者さ」

あまりの衝撃にアルベルトの怒りと思考は凍り付いた。

神……？ 神だ……？ だったら……尚更これはどういうことだ？

義姉さんはおまえらの命令に従って、魔王を倒したんだぞ!？」

「何のつもりかって？ すべてが終わったから、魂を回収しにきたんだよ。三百年後にまた頑張ってもらわねばならないからね」

ルシアーナの胸から青い光が溢れ出て、神の右手に集まっていく。

同時に床に転がったままの魔王核がパキリと砕け、赤い光が溢れ出た。それは神の左手に集まっていく。

「人と魔族の争いの歴史……ここで終わってしまったのはつまらない。だからこの二つの魂は決着がつくたびに回収されて、永遠に輪廻する……これはそういう遊びなんだ」

アルベルトはすべてを理解した。

太古より続く勇魔大戦。そのすべてが勇者と魔王の相討ちに終わっていると伝えられて

この場に神は一人ではなかった。こんなにも恐ろしい存在が……。

「何ら特別な【ギフト】もなく、鍛錬のみでここまで強くなっただけはある」
 「並大抵の精神力の持ち主ではない。……しかししさか図に乗りすぎだな？」

神々がさらにどこからともなく姿を現していく。三人、四人、五人……。

アルベルトは恐怖した。抗うなどできるはずがない。このときはそう思った。

この世界には、このような絶対者たちが君臨していたのだ。

これが勇魔大戦の結末……。

「ふふふ、【時の神】よ。最後まで戦い抜いて真実を知ってしまった不幸な英雄を、いつも通り【時の牢獄】に」

「死以上の苦しみを、褒美にくれてやれ」

神々が悪趣味に笑う。

「心得た……」という返事とともに、カッと強い光が放たれた。

どうしたら防げたのか、どうしたら逃げられたのか、わからない。

——気がつくと、アルベルトは真っ白い空間に立ち尽くしていた。

プロローグⅡ 時の牢獄

「……貴様ら、必ず後悔させてやるぞ！ この俺を生かしたまま、こんな場所に閉じこめたことを!!」

アルベルトは絶叫した。

しかし獣（けもの）みたその叫びを聞く者は、誰もいない。

眼前には見渡す限りに白い地平線が広がっている。無限の空間、無限の時間……。

あらゆる時空と繋がっていない、孤立した世界。

——時の牢獄。アルベルトはそういうところに閉じこめられたのだった。

体感時間にして一週間が過ぎていた。

肉体は餓えも渴きも感じていない。どうやらこの空間で餓死をすることはないらしい。

しかし孤独と虚無の絶望が、アルベルトの精神を押し潰（つぶ）していた。

ここには永遠に何も無い——これはそういう刑罰なのだ。

待ち受ける未来は——自我と精神の崩壊のみ。そしていずれは自殺するのだろう。

「壊れてたまるものか！俺は自分から死を選んだりはいしない！これ以上……貴様らの

思い通りになどなつてたまるか!!」

憤怒を燃やし続けることで、アルベルトはかろうじて正気を保っていた。虚空^{こくう}に向かって叫びながら、真つ白い空間を彷徨^{さまよ}っていった。

体感時間にして三ヶ月が過ぎた頃、アルベルトはそれを見つけた。

……きつとあるはずだと信じていた。信じて探し続けて良かった……。

アルベルトが見つけたものは、死体だった。

これは自分と同じく、勇魔大戦を戦い抜いた末に真実を知らされて、この時の牢獄に放りこまれた『過去の大英雄^{えいゆう}』に違いない。

死体はまったく腐敗^{ふはい}しておらず、たった今、息絶えたかのようだった。

憤怒しているような、悲嘆^{ひたん}しているような……凄まじい死に顔をしている。

死因はわかりきっている。自殺したのだ。

——そして死後の魂^{たましい}が、すぐそばに残留^{れんりゅう}していた。

閉ざされた時空間で行き場もなく、新たな生命に転生することもできずにいる。

すなわちこの英雄は死を選んだところで解放されたわけではなく、今も無限の時間に苦しみ続けている。……つくづく最悪の牢獄だ、ここは。

まずは『これ』を探して集めることにしよう。アルベルトはそう決めた。

体感時間にして百年が過ぎた。

はつきりとした『目標』さえあれば、人の心は持ちこたえることができるものだ。今では無駄^{むだ}に叫ぶこともしなくなった。心は凪^ないだ湖のように落ち着いている。

アルベルトは数十体の死体を一箇所^{いっかしょ}に集めることができていた。

……準備が整った。これでようやく最初の一步を踏み出せる。

「彷徨えし魂よ、我が魔力を息吹^{いぶき}となして、生命^{いのち}の夢を取り戻せ——」

アルベルトは死体の前に跪^{ひざます}いて、呪文^{じふもん}を詠唱^{えいしょう}した。

——亡魂操奏^{リ・アニメイト}

アルベルトの右手から幾筋^{いくじん}もの光の糸が伸びて、死体や魂と結ばれていった。

発動させた大魔術は、死者を屍鬼^{ゾンビ}として復活させるというものだ。

魂と亡骸^{なきがら}が結合され、英雄たちが、次々と起き上がった。

「……これは何のつもりだ。見たところ『新顔』のようだが……」

「ようやく考えるということをお忘れつつあったというのに」

「絶望の末に朽ちた我らをこうして集めたところで、できることなど何もないぞ……」

英雄たちの表情に喜びはない。誰もが絶望にすり切れた顔をしている。剣士もいれば、魔術師もいる。誰もがその時代において最強だった大英雄たちだ。だが何ができるかと問われたならば……彼ら全員と手を組んでかかって、あの神々には歯が立つまい。そんなことはわかってる。

「強くなりたい」と、アルベルトは切り出した。

「あなたたちが知っている、俺の知らない技や魔術をすべて教えて欲しい。

俺もあなたたちもまだ知らない、未知の技や魔術を研究するのを手伝って欲しい。何ができるかと問われれば、こう答えよう……限界を極めることができる。

ここには無限の時間がある。俺はこの世界のすべてを知り尽くすことができる。

……俺は決して屈しない。俺はここで無限に鍛錬し、限界まで強くなる！」

「限界まで強くなったところで何の意味がある？ ここからは出られないというのに」

「魔術を研究することは、この世界の理を紐解くことに等しい。この世界の仕組みをすべて解明し尽くせば、この牢獄から抜け出す術も見つかるはずだ。俺は神を超える最強の存在になって、ここから脱出してみせる」

「……バカな、そんな細かい可能性のために、どれほどの時間を費やすつもりだ」

「時間ならば、何千億年でも。すべては俺の精神力次第だ」

心の持ちよう一つで、『最悪の地獄』は『究極の修行場』に変わる。

英雄たちはしばし沈黙した。呆れや驚きといった感情が、波のごとく彼らに広がっていく。しかしそこにアルベルトへの悪感情は含まれていなかった。

「……なんという意志力。絶対者の玩具に過ぎないと知って、なお立ち向かうか」

「神を前にして心を折られた私では、そのような発想には至らなかった」

「絶望の渦中にあっても諦めぬものこそまさに真の英雄……」

「だが、まともな発想ではない。どうしてそこまでやろうと思える？」

その問いはもはや遠い昔のように思える感情を、瑞々しくアルベルトの胸に蘇らせた。

「……大好きだった姉さんの魂を、救うためだ」

——そして。

永久に限りなく等しい時を、アルベルトは狂うことなく過ごした。

一章 アルフレッド

三つの大国が支配する緑多き大地、【ローディシア大陸】。

その片隅に、大国の支配力から逃れるようにして【シャングリ・ラ】という村がある。集落といった方が相応しいぐらいのこの小さな村は、とある神童が生まれたことをきっかけに、急速に発展していた。

ついには周辺大国にも『人知れぬ桃源郷』として噂が立つようになりつつある。神童の名は、アルフレッド・マグナス。

ある日の夕暮れ——シャングリ・ラのすべての家の窓から、眩い光が溢れ出た。

「どうやら稼働成功、だな。みなさんお疲れ様でした！」

アルフレッドはほっと胸を撫で下ろした。

……理論が正しいことは、この少年にはわかりきっていた。それでも成功するかどうか心配だったのは、実際の作業をすべて村人たちに任せただからだ。

「すげえ、本当に何もせずに光ってやがる！ 魔術も火種もいらなんて!!」

「夜がなくなっただ！ 一日がすげえ長くなるぞ!!」

——小さな村に新たに完成したのは、魔力発電所である。天然の魔鉱石や、魔術師が魔力をこめた魔石を燃料とし、電力という安定したエネルギーを生み出す。

電力は電線を伝って各家庭に配分され、魔力に乏しい人々の生活を豊かにしてくれる。……この村にはこれぐらいの魔導技術がちょうどいいだろう。

闇雲に時計の針を進めればいいというわけではないからな。

「すげえぜ、アル!! 説明されて理解したつもりだったけど、信じられねえ!」

筋骨隆々たる大男がアルフレッド——愛称は『アル』——に抱きついた。

「やめてよ、父さん! 汗ばんだ大胸筋がムチムチしてて気持ち悪い!」

フレッド・マグナス——知的なアルとは似ても似つかぬ筋肉質な父だ。

「それじゃあ私がアルくんを抱きつくっ!」

父の大胸筋から逃れたアルに、今度はおっぱいの大きな少女が抱きつく。身長差のせいで、アルの顔はおっぱいに埋もれてしまった。

「ミア姉もやめてよ! おっぱい当たってるから!!」

「そりゃ当たってるでしょ。この体勢で自分で気づいてなかったら、私バカだよ。もー、アルくんはまだそういうこと意識するような歳じゃないでしょー?」

ミーア・グリンウッド。シャングリ・ラの野山で狩人として鍛えられた健康美と潑刺とした笑顔がトレードマークの近所のお姉さんだ。

十二歳のアルに対して十五歳。お姉さんぶってはいても、彼女もまだ少女である。

「俺はとっくに思春期だよ！ 都だったら初等学院に通いはじめる歳だからな！」

「都のガキはませてるって言うからな！ 初等学院でもやることやっちまうってよ！」
フレッドがガハハと笑う。

「ダメーっ！ アルくんはそんなハレンチな学院行っちゃダメーっ！！ アルくんは永久不変にかわいい存在だから何歳になってもお姉ちゃん離れしなくていいのーっ！！」

「くっ、苦しいっ！ おっぱいで息が……！！」

「まあアルが都の学院なんか通ったって、学べることなんざ何もないだろうしな」
「アルくんは何でも知ってるからねー♪ お姉さんは誇らしいよー♪」

……事実、アルフレッド・マグナスは何でも知っている。

この神童の肉体には、異なる人生をすでに経験した魂が宿っている。

——大賢者アルベルト・ルグラン。

彼は時の牢獄で体感『四十六億年』におよぶ英雄たちとの鍛錬・研究を終えた。



あらゆる武芸と魔術、そしてこの世界の理をすべて学び尽くし、最強を極めた。そして……自らの遠き血縁に魂を転生させ、牢獄からの脱出を果たしたのである。現実ではおよそ三百年の時が流れていた。それは彼の計算した通りだった。ルシアーナ姉さんの魂が転生し、再び勇魔大戦がはじまろうとしている……。魔界との国境では魔族たちの活動が徐々に活発化してきている頃だろう。魔王の復活とともに、それは本格的な侵攻へと変わるはずだ……。

それにしても、とアルは思う。

人生をやり直すとはこういう感覚なのか……。

精神というものは、ある程度、肉体に引きずられるものらしい。

賢者ともあるう自分が……年上のお姉さんに甘やかされるのが照れくさくてたまらない。押しつけられるおっぱいの感触に、罪悪感じみた恥ずかしさを感じてならない。賢者の魂が宿っていても、脳みそは十二歳の少年の思考回路のまま――。まさに『思春期』なのだ。

「もう離してくれよー！」アルは顔を赤くして、ジタバタしてしまふ。

「だめーっ！ むぎゅーっ!!」

ミリアはアルの反応を面白がって、ますます強く抱き締める。

すべてを知り尽くした大賢者の魂を宿す少年。この世界で彼の思い通りにできないものといえば、『年上のお姉さん』ぐらいだろう。

「……おやや？ 誰かが村に近づいてきてる。知らない顔だ」

不意にミリアがあらぬ方角に顔を向けて、アルをようやく解放した。

狩人としての勘……などではない。

彼女には【千里眼】という【ギフト】がある。

ギフトとは神に愛された一握りの魂だけが授かる、生まれつきの固有スキルだ。

その発生確率はおよそ十万分の一。こんな小さな村にギフトの所持者がいるのは、奇跡と言っても過言ではない。

三百年前は知る人ぞ知る存在だったが、現代ではだいぶ知られるようになったらしい。ミリアの千里眼は気配察知スキルの頂点である。

あらゆる魔術を極めて、これを上回る索敵手段は存在しない。すなわち理論上、どんな相手にでも先制攻撃をとれる。

ミリアは村の見張り番としての役割を担っていた。

「なにイ……？ 行商人が来る予定はずつと先だぞ。この村に何の用だつてんだア？」

フレッドが剣呑な顔をして筋肉を膨れあがらせる。

……この村の住人は、余所者に対して異常な警戒心を抱いている。

もともと大国に追いやられて逃げてきた少数民族が作った村なのだ。

しかも現在、この村はアルのおかげで急激に発展しており、その噂は隠しきれず広まりつつある。いずれ三つの大国のどこかがアルを奪いに侵略してくる——そういう被害妄想じみた恐怖心に、村人たちは囚われていた。

「ぬぬぬ……アルくんは絶対に渡さぬぞっ！」と、ミーアも眉を吊り上げた。

「ミーア、村の掟だ！ 警告をくれてやれ!!」

フレッドがダミ声をあげると、ミーアは背に担いでいた弓を手にとった。

アルが設計したミーア専用の弓だ。

オリハルコンと鋼糸でできており、常識外れの威力と射程距離を誇る。

大人が三人がかりでなければ引けない剛弓だが、ミーアは軽々と使いこなしてみせる。

ミーアはその場で高く跳躍し、上空から彼方へと射撃した。

放つたのは、『紹介なき者、侵入者とみなす』という手紙つきの矢文。

一見さんお断り。馴染みの行商人の紹介なく村に近づく者は、もれなくこの手荒い警告

を受けることになっている。

……相手からすると、あり得ない超遠距離から非常識な威力の矢が前触れもなく飛んできて、足元に深々と突き刺さるのだからたまらない。そんなの絶対怖い。

いつもは不用意に村に接近する者があっても、すぐごと逃げ帰るのが常だったが……。

こたびの相手は、違った。

「むむむ……私の警告を無視してなおもこつちに来る!!」

遙か遠くの風景を見通して、ミーアは唸った。

「なにい!? 何が目的だ!？」

「まあまあ、落ち着きなよ二人とも。いつものことだけど野蛮だよ、やってることが」

アルはのんびりと取りなそうとしたが、二人は耳を貸さずに興奮した。

「目的なんてアルくんに決まってる! 許せぬっ!」

「腕か足でも射貫いてやれ! 二度とそんな気を起こさねえようにな!」

「そんなことして、治療するの俺の役目でしょ?」

俺のこととそんなに熱くならないで欲しいんだけど、とアルは思う。

四十六億年もゾンビ以外と交流せずにいたせいか……いや、もともとこういう性格だったか? 他人の激しい感情を御するのが、どうにも苦手だ。

つい物事から一步引いて、他人事のように達観してしまう。

アルにはこの出来事のあらましが、すでに見えてしまっていた。

ミーアは再び跳躍し、上空から矢を連射する。

今度は脅してはいない。命までとはいわずとも、手足を射止めるつもりだ。

矢の行方は千里眼の持ち主であるミーアにしか見通せないが……、

「全部防がれた！」と、彼女は驚愕の声をあげた。

「へえ、それはただ者じゃないな。どこかの国の騎士団長クラスが来てるんじゃない？」

アルも驚いた口ぶりで言った。

根が小さなフレッドは「マ、マジかよ……」と、一転して怖気づいた。

しかしもちろんそんな身分の人間が従者も連れず一人でやってくるはずがない。

だとしたら……『あの学院』の関係者ということになるだろうな。

「アルくんから習った弓をコケにされるなんて許さない！」

フレッドと違って根っから武闘派なミーアは、森へと駆け出した。

すでに位置を掴まれた狙撃ではなく直接戦闘に切り替えようというのだ。

「俺もついていって様子を見てくるよ」

アルはフレッドを振り返った。「父さんは、何も心配いらないから待っていて」

戦闘が始まっていた。

ミーアは森の中で細かく位置を変えながら弓を射る。

来訪者はそれを受け止めつつ、狙撃者を探って疾駆する。

そしてついに両者はお互いを視認できる距離まで接近した。

アルもそこに追いついた。

相手は……女の子だった。

白銀のごとき少女だった。銀色の長い髪が、さらさらと風にたなびいている。

真っ白い顔に浮かぶ無表情には、難敵と対峙しているという緊張感が微塵もない。

端正なブレザーにスカートという制服姿。

革の盾を装備している。これまで放たれた数十本の矢が、盾に針山のごとく突き刺さ

っていた。

あんな簡素な盾でミーアの剛弓を受け止められるはずがない。

よく見ると……矢は盾に突き刺さるのではなく融合していた。

「……『錬金術士』か」

錬金術——何かと何かを融合させて別の何かを生み出す、本来なら非戦闘向けの魔術。

しかしこの少女は、飛んでくる矢をことごとく盾で受け止め、盾が貫通されるよりも速く、矢と盾とをべたりと融合させてしまったのだ。

普通の錬金術ではない。ミーアの千里眼と同様、特別なスキルが働いている。対峙しているミーアは弓を手放して、ぺろりと唇を舐めた。

「さんざん試してよくわかった。意識して受けられたら融合される。……だったら、意識の外側から切り刻めばいいってことでしょ？」

そう言つて、腰に下げた鞘から短刀をぬらりと引き抜く。

アルは眉をひそめた——ミア姉は殺しても構わないつもりでやる気だ。

彼女は狙撃をしている間は冷静だが……接近戦になると手加減ができなくなる。

「……こちらあなたのこと、観察させてもらいました……」

白銀の少女が口を開く。鈴を転がすような声だった。

「あり得ない距離から狙撃してきたのが……あなたのギフト。……それがバレたあなたには、もう『脅威』は残っていない……」

的確な分析だ。ミーアはすでに切り札を晒してしまっている。

「それはどーかな？ 私にはかわいい師匠から習った技が残ってる！」

ミーアの反論も真理を含んでいる——ギフトが戦いのすべてを決めるわけではない。

「あなたの矢は怖かった。だから仕返しに……今度は私のギフトを見せてあげます」

——白銀の少女の瞳が真っ赤に輝き、取り巻く空気が変化した。

世界の理が、歪む。それは人外の可能性——ギフトの力が使われる気配だ。

ギフトが戦闘においてもつとも警戒すべきものであることは事実だ。それはすべてを知り尽くした賢者でも予測困難な『未知の奇跡』を引き起こす異能なのだから。

「天変流転、我が意のままに……『万物融合』」

無数の矢が突き刺さった盾が、ぐにやりと歪んだ。

突き刺さった矢のすべてを飲みこんで、別の形に転じていく。

——あつという間に、巨大な槍となった。

妙な形状をしていた。先端から後方に向かって、螺旋状の溝が走っている。

……あらゆるものを融合させ、自由自在に変形させるのが彼女のギフトということか。

「上位旋風魔術」

緑色の術式が浮かび上がる——上位格の風の魔術だ。

「上位灼熱魔術」

朱色^{しゅいろ}の術式も同時に浮かび上がる——上位格^{ハイクラス}の熱の魔術。

「魔術融合、圧縮……」

それら二つの術式が空中で重なり合い、瞬^{またた}く間に小さく圧縮されていく。

彼女が融合・変形させられるのは物質に留^{とど}まらないということだ。

風と熱の上位魔術の圧縮融合——そこから生み出される爆風^{ばくふう}は、【極大格^{グランクラス}】の一步手前である【超級格^{エスクラス}】と同等の威力を発揮するだろう。

白銀の少女は完成した術式を背にし、槍を構えた。

「武芸が得意そうには見えないけど？」

ミーアが挑発^{ちやうはつ}的に問いかける。白銀の少女は無表情のまま答えない。

直後、ミーアは顔をはつとさせた。相手の意図を察したのだ。

——風と熱を融合させた爆風で、あの槍を砲弾のごとく発射させようとしている！

槍に刻まれていた螺旋状^{ライフリング}の溝は、空気抵抗^{ていこう}でブレることなく正確に槍を飛翔^{ひようこう}させるためのものだ！

まさしく必殺の一撃^{いちげき}。その貫通力^{くわんつうりき}は、易々^{やすやす}とミーアの防御力^{ぼうえりきよ}を突破^{とつは}するだろう。

「なるほど……それは怖いね」

——だがそれを回避^{かいひ}できれば、ミーアは接近戦に持ちこんで相手を切り刻むだろう。



白銀の少女はミーアをじつと観察しながら、槍を発射するタイミングを窺う。ミーアも相手の槍を即座に回避できるよう、腰を落とした構えをとる。アルの見立てでは両者は互角だ。勝負はこの一撃が当たるかどうかで決まる。そしてどちらかが深手を負う。この睨み合いが終わった瞬間、それが決まる。

「……二人とも俺をめぐって争うのはそこまでにしてよ。やりすぎだつてば」

ミーアの背後にアルがいきなり現れて、彼女をぎゅっと抱き締めた。

「アルくん!」

ミーアは驚きの声を漏らして振り返り、緊張の糸が切れてしまう。

「……新手!」

白銀の少女は突如あらわれたアルに驚きつつも、魔術のトリガーを引いた。

圧縮された爆風から、唸りをあげて必殺の槍が飛翔する。

それは音速を大きく超えた速度だった。

しかし光よりは遅かった。それはアルが魔術を紡ぐのに十分な猶予だった。

「極大爆轟魔術」

アルの背後に真つ赤な術式が大きく浮かび上がり、消えた。

次の瞬間、耳を聳するような爆音が夕暮れの森に響き渡った。

大爆発が指向性をもつて発生し、怒濤の勢いで少女に襲いかかる。

槍はその爆風を貫けず、あらぬ方向に蹴散らされていく。

高温・高圧の爆風は勢いを衰えさせることなく、進行上の木々を燃やすのではなく炭化

させながら、白銀の少女に雪崩れこんで行く――。

「くっ……!! ……え?」

――彼女の鼻先一寸手前で、爆風は煙のように霧散した。

寸止めであった。悲鳴をあげなかったのは、大したものだ。

「うっわ……アルくんの魔術、相変わらず、すんごい……」

アルの力を知っているミーアも、改めて舌を巻いている。

まるで死の爆風であった。白銀の少女には危害を加えなかったものの、その周囲の木々

や茂みはすべて炭化し、あたり一面が真つ黒い炭の野と変わり果てている。

「今……、あなたは……、いったい何をしたのですか……?」

白銀の少女は目をぱちくりさせて問う。

「きみが作った爆風よりも強い爆風で、槍をはね返したただだよ」

「極大格の魔術を……一瞬で……?」

魔術の詠唱速度は魔術師の実力のバロメーターのひとつだ。

術式によって呪文を簡略化させているとはいえ、そこに腕の差が出る。

しかもこの少年は、瞬間移動をしながらそれをしなかったか?

「きみの術式は不完全だったからね。もちろんそれだけの差ではないけれど」

「私の術式が……不完全……?」

信じられぬという反応だった。それはそうだろう、彼女の制服はこの時代における最先端の教育を受けていることを示している。

しかしアルにとっては時代遅れだ。

「……私が一つ魔術を詠唱する間に……あなたは十倍の威力の魔術を十は発動させられそうですね」

「その分析は正確じゃないね。きみが一つ魔術を詠唱する間に、俺は百倍の威力の魔術を百は発動させられる」

ぞくりと白銀の少女が身を震わせた。……アルが言葉にこめた魔術的なイメージを感じ取り、それがまったく大袈裟ではないことを直感したのだ。

「降伏します。……あなたがシャングリ・ラの神童、アルフレッド・マグナスですね」

白銀の少女がボロボロになった槍に歩み寄り、それを拾い上げる。

槍が光を帯びてぐにやりと歪み、革製の学生靴に変化した。変化というより、元に戻ったのだろう。融合させられていた大量の矢が分離して、バラバラと地面に散らばった。

「その制服、『アメリカ魔術王国』の【エーテルメギア勇者学院】のものだね?」

「……はい。私はエーテルメギアの生徒会長、……アリア・ダカーボと申します」

白銀の少女はぺこりと頭をさげて、名乗った。

物腰は丁寧だが、その真つ白い顔に友好的な笑みは浮かんでいない。

冷たい無表情。ただしそれは敵対心を残しているのではなく……、

単に感情を表に出すのが苦手なタイプに見えた。

「好きな食べ物?」

アルは突然問いかけた。アリアは「……え?」と目をパチクリさせる。

「……オ、オムライスです」

「なるほど。それで、俺に何の用かな?」

「……はい。エーテルメギアの受験資格は十五歳からとなっていますが……、あなたの特別な才能を見こんで……、飛び級生としてスカウトに参りました」

ふむ、やっと来たか。

「……えつ。えええつ!!」

ミリアが目を白黒させて叫んだ。

「わ、私たちのアルくんをスカウトなんてしちゃだめええええええええええええええええ!!」

十

「このオムライスは……」

黄色い小山のようなオムライスを一口食べると、無表情なアリアは瞳を輝かせた。

冷たい無表情の中で、赤い瞳だけが爛々と輝いている。

「と、とても美味しいです……。料理づくりまで神童とは……」

感動に打ち震えるように、言う。

アルはアリアを自宅の夕食に招いたのだった。

アルの両親……フレッドとリアンは大国アメリカの、恐らく貴族の息女であろうアリアに緊張しきってしまい、口数が少なくなってしまうている。

「この美味しさには……何か特別な秘密でもあるのでしょうか……?」

「食材の質が違ふんじゃないかな。鶏は餌を変えようと、肉も卵も美味くなる」

そして米、肉、卵……すべての食材にそれぞれ最適な熱を加えてある。

世界の理を知り尽くした大賢者は、世界最高の料理人でもある。この村の人間なら誰もが知っていることだ。

「お肉も贅沢に入っていて……。このような歓待……、恐縮です……」

「この村では鶏は別に貴重じゃないんだ。遣伝子を組み換えて効率を高めてるから」

「いでんし……?」アリアは無垢な顔つきで首を傾げた。

「……よくわからないですが……。……とにかくすごいですね……。アルは」

それから物珍しげに居間を見回した。

けっして華美な装飾がされた部屋ではない。しかし、見たこともないものがたくさんあるのだろう。天井からぶら下がる電灯だとか。

「シャングリ・ラは……まるで未来都市のようですよ……」

アルが村にもたらしたものは発電所だけではない。上下水道、製鉄所、医療施設など、暮らしの基盤となる様々な施設が整備されている。

「これらの発明を……十二歳のあなたが本当に一人です……?」

「どれもみんながちゃんと理解して、自力でメンテナンスできるギリギリのレベルののだよ。今ここで魔術文明の行き着く果てを示したところで、みんなのためにはならないからね」

「……は、はあ。どういふことなのでしょう……?」

「というかミア姉、食べづらいから離れてくれない……?」

ミアも夕食の席についてきていた。

しかしオムライスには一向に手をつけず、まるで『これは私のもの』と言わんばかりに横からアルにしがみつきの、

「がるる……ぐるる……」と、アリアを威嚇していた。

当のアリアはそんなことは気にもとめず、アルとオムライスに釘付けだった。

やれやれ。アルはため息をついた。「……本当に野蠻で非礼な姉さんだ、ミア姉は」

「野蠻じゃないですう、弟想いなだけですう」

しかしミアは『行かないで』とは決して言わない。

アルの意思をすでに察しているのだろう。すべてはアルが決めることだ。

だからアリアを威嚇したり、頬を膨らませてむくれたりしかできない。

「ごめんね、ミア姉」

アルは彼女の頭をなでなでして慰めた。

「……神童なんて信じていませんでしたが、……今では認めざるを得ません。……あなたも紛れもなくそれです。……是非ともエーテルメギアに来てもらわねば」

アリアはオムライスを平らげてから、静かに告げた。

その瞳には、使命感じみた熱意が宿っている。

「口元にトマトソースついてるよ」

「……失礼しました。……ありがとうございます」

とくに恥ずかしがるでもなくアリアは口元をハンカチで拭いた。

エーテルメギア勇者学院——三百年に一度の勇魔大戦に備えて、勇者に覚醒する見こみのある優秀な子供たちに、最高の英才教育を施すための学院だ。

しかしアルは自分が勇者ではないことをすでに知っている。

何故なら次の勇者にもルシアーナの魂が選ばれと知っているからだ。

その転生したルシアーナも、この学院に入学する可能性が高いだろう。三大国家の筆頭であるアメリカ魔術王国が総力を上げて勇者を探しているのだから、高確率でそうなる。

——アルは誘いに応じるつもりだった。

むしろスカウトをされるために、この村を発展させて噂を広めていたのだ。育ててもらったことへの恩返し気持ちももちろんあるが。

「一つだけお願いをしていいかな」

「……なんでしょう? 私にできることであれば……、何でもします」

「ミア姉もスカウトして欲しい。きみと互角の力を見せた彼女は、それに値するはずだ」「えっ!」と、ふて腐れていたミアは身を跳ね起こす。

「互角……、そうですね。彼女が最初から本気で狙撃をしていたら……どうなっていたかわかりません。負けていたとは思いませんが……。わかりました、推薦しましょう」

「私もアルくんと一緒にやっていいの!? やったーっ、大逆転っ!!」

「最初からこうして交渉を持ちかけるつもりだったからね」

「でもでも、私みたいな田舎者が試験に合格できるかなーっ!?」

「ミア姉ならどこに出ても通用するよ」

アルに頭をなでられて、ミアは「えへへ、そかなー?」と機嫌良く目を細めた。

シャングリ・ラから出たことがないから自覚がないが、アルから英才教育を受けた彼女はすでにレベル90。戦闘センスの塊のような少女だ。

弓や剣のスキルも含めれば、すでに世界で最高クラスの物理アタッカーといえるだろう。むしろあれだけ熱くなったミアと互角に戦えたアリアこそが異常だ。

アルは目を細めて、アリアの魂とそこに刻まれた能力値を鑑定した。

レベル82……ミアほどではないが、この若さとしては相当の高さだ。

魔力が高く、多くの魔術系スキルを修得している。やはり接近戦は不得手。

そして『**万物融合**』というギフトを所有している。

あらゆるものを錬金術の対象に選択し、あらゆるものと一つにさせられるという効果。

本来の錬金術の枠組みを超えて無制限に。抽象的な概念や事象でさえも……。

人間さえも。

「……もしかして、私の魂を鑑定しましたか……?」

「ごめん」

「いえ……、しかし私にはあなたの魂を鑑定できないようです。……少し悔しいです」できたらずさぞかし驚くことだろう。

アルの能力値はすべてがこの世界における上限に達している。

「……それではよろしいでしょうか? 息子さんを連れて行ってしまっても……」

アリアはアルの両親に目を向けた。

「も、もちろんでさあつ! うちにはもったいねえくらい名誉な話ですっ!」

「オ、オムライスのおかわりはいかがかしら!」

フレッドとリアンは田舎者丸出しの慌て声をあげる。

アリアは「……是非ともいただきます!」と、やや強めの語気で皿を差し出した。

食事の後、アルは別れを告げるべく両親と向き合った。

「それじゃあ父さん、母さん、ごめん。行ってくるよ」

思わず『ごめん』という言葉がこぼれ出た。

「……まあ、おまえの優秀さは俺の倅とは思えないぐらいだからなア。都からスカウトがくるのも当然だ。本当は、いずれこうなるだろうって予感があったさ」

「ねえ、アルフレッド。これは私が勝手な想像をした上でのお話なのだけど……」

リアンは優しい手つきでアルを抱き締めた。

「私ね、お腹を痛めて産んだ子供を死産したと思ったとき、私も死のうって思ったわ。それほど悲しかったの。だけどあなたは目を開いてくれた。それで私は救われたのよ」

この二人の本来の息子は死産だった。

時の牢獄でアルベルトはそういう運命にあった子を選んで自らの魂を移したのだ。

それから……赤子として生まれ直したアルは成長するにつれて自我を確立させていき、今、アルベルトとしての人生、目的に向かおうとしている。

それは身勝手なことだ。アルはそう思う。しかし――、

「あなたにおっぱいをあげて、オムツを換えてあげて……そりゃあ大変なこともあったけど……あなたを育ててきたのは本当に嬉しいことだったの。だから」

リアンはアルを抱き締める腕にぎゅっと力をこめた。

十二年。時の牢獄を経験したアルからすると、一瞬とも思える時間。

しかしこれまでの人生でもっとも平穏で幸福な時間だった。

アルは理論的に最高の料理を作れるが、一番の好物は母の手料理だった。

アルは人類最強だが、父の逞しい両腕に理屈ではない頼もしさを感じていた。

「あなたは私の息子よ。『ごめん』という言葉は撤回しなさい」

「そうだぞ。アルフレッドって名前は俺の名前から付けたんだ。誰がなんて言おうと、おまえは俺の息子だ。自由に生きてもいいが、この名前を捨てることだけはするなよ」

ルシアーナ姉さんはたった一人の家族ではなくなってしまった。

だからって姉さんを助けることがどうでもよくなるなんてことは絶対にいけれど。

「ありがとう……父さん、母さん」

アルは満ち足りた気持ちで、二人に別れを告げた。

「でも、どうしてそんなに乗り気なの？ こんな積極的なアルくん初めてだよ」
家を発つと、ミーアが問いかけてきた。

「ま、まさかフレッドさんの言葉を真に受けて、エッチな出会いが目的なんじゃ!? ダメ

だよ！ そんな不純な目的で村を出たいなんて許されざるよ!」

「違うよ！ 俺だって学校に通ったら、得られるものがあると思うんだ」

授業で学べることもあるとは言わない。得たいものというのは——ギフトだ。

輪廻した勇者ルシアーナとただ再会するだけでは、彼女を救うことにはならない。彼女を真の意味で救うには、神々を倒さなければならない。

しかし——あらゆる魔術と武芸を身につけ、限界まで能力値を高めても、神に勝つことは不可能。アルはそう結論つけていた。

神はこの世界を管理する存在だ。

そして限界とは、神々が許す範囲の上限に過ぎない。

管理者である神を倒すには限界を超える必要があるのだ。

——限界を超えるための唯一の可能性が、ギフトだった。

神が悪ふざけで作ったような性能を誇るギフトは、この世界における最大の『不確定要素』だ。すなわちギフトだけが、神の想定を超え得る力を持っている。

ミーアの千里眼は神にすら『先制攻撃』をとれるだろう。

アリアの万物融合は『神も知らない何か』を生み出すことができるはずだ。

普通の人間が、一人一個のギフトを使ったところで、たかが知れている。

だが限界まで能力値を極めた者が、複数のギフトを組み合わせたなら……。

アルはギフトを持つていない。運良くギフトを授かって生まれるのは十万人に一人程度。それに恵まれなかったことがアルの限界。だから手に入れなければならない。

エーテルメギア勇者学院には世界中から特別な才能の持ち主が集められている。

彼らのギフトを奪う……あるいは譲ってもらう……。

そのための手段を、アルは用意していた。

最強を極めた大賢者は、最強を超越するために勇者学院に向かうのだ。

「では出発しましょう……。隣村まで歩けば……、アメリアへの馬車が出ています」
アリアがぎゅっとアルの右手を取った。

「これは、何のつもり？」

「年下の子と夜道を歩くときは……、迷子にならないよう手を繋ぐものでは……？」
神童とは認めても、十二歳の子供であると信じ切っているのだった。

「やれやれ。歩く必要はない。二人とも、このまま掴まっていってくれ。……転移」
アルは術式を起動させた。

次の瞬間、三人は遙かな距離を越えてアメリカ魔術王国にいた。
学院都市【エーテルブルグ】——この街にエーテルメギア勇者学院はある。

「……瞬間移動！」

アリアが周囲を確認するようにしてから、驚きの声をあげる。

「戦いときも使っていたけれど……こんな魔術があるなんて……」

「そんなに驚くことじゃないけど。きみたちの術式は不完全だからね」

「……不完全、ですか……？」

転移魔術ぐらい、魔王との決戦時点のアルベルトでもすでに修得していたものだが。

どうもこの三百年間で魔術はまともな進歩をしてこなかったようだ。

というよりアリアが魔術を使う姿を見て、改めて確信したことがあった。

この時代の人々が使う魔術や術式は、アルが時の牢獄で研究していたころの失敗作や試作品と、何故かまったく同じだ。

体感時間にして三十億年ごろの研究と、完全に合致する。

まるで研究途中のデータを、そっくりそのまま世界に写し取られたかのように。

世界のあらゆる魔術の進歩の仕方が、過去の自分と偶然一致する……。

そんなことがあり得るだろうか？

エーテルメギアの授業を受ければ、その原因にも思い当たるか……？

「まあ、転移魔術なんて大したものじゃないよ。で、どちらに向かえばいい？」

「……時間が時間ですから……まずは宿に向かいましょう」

アリアは戸惑いを見せつつ、アルの手を引いて歩き出した。

二章 転生賢者の入学試験

「入学試験が終わるまでは……こちらの宿に滞在してはいかがでしょう……？」

いかがでしょう、と言われて文句を言えるような宿ではなかった。

優雅なたたずまいの洋館だった。

ここがこの街で最高の宿であることが、ひと目で確信できる。

あのうるさいミーアが目をまん丸くして言葉を失うほどだ。

扉を開くと、真っ赤な絨毯を敷き詰めたエントランスが広がった。

アリアは我が物顔でそこを横切り、慣れた様子で受付に命じた。

「空いている中で……一番良い部屋を……」

「アリア様!? た、ただいま確認いたします!」

のんびりとしたアリアの言葉に、受付の男が過敏な反応を見せる。

「ね、ね、アルくんアルくん、もしかしてアリアさんってすごい人なのかな?」

「かもしれないね。生徒会長って言っていたけど、エーテルメギアを任されている大貴族の息女とかかもしれない。だとしたら、この街の支配者みたいなもんだ」

「あ、そうだ! アリアさん、私とアルくんは相部屋でいいからねーっ!」

アリアの背中に向かってミーアが声をはりあげる。

えっ!? と、アルは慌てた。ミア姉と相部屋……?

まさか二人きり……?

そんなことになったら、間違いなくひと晩中かわいがられてしまう。

たとえばあのバカでかいおっぱいを押しつけられて抱き枕にされてしまったり……。それは困る。いや、別に困らない……。いや、やっぱり十二歳の青少年的に困る!!

——しかしアルの密かな葛藤は、いらぬ心配であった。

「えーっ、アリアさんも同じ部屋に泊まるの?」

「私もこんなに早く帰る予定ではなかったから……まだ帰れないのです……」

アルはほっと胸を撫で下ろした。

安心したような……ちよつとだけ残念なような……。

「わ、このベッドすごいフカフカ! 中に入ってるの朧じやないとみた! きつと羽毛だ! ほら、アルくんも一緒にっ!!」

「うわっ! けつきよく抱き枕にする気か!」

「ドーンっ！」ミリアがアルにしがみつきの、もろともベッドに飛びこむ。
 ぼよん、と二人の体が跳ねた。

アリアは向かいのベッドに腰を下ろし、ガラス玉のように無垢な瞳でそれを眺めていた。
 「お二人は血が繋がっていいのに……家族のように仲がいいのですね……」

「もっちゃん！ 家族以上の関係だよ！ アルくんは血よりも濃い魂で繋がってる私のソウルブラザーだからね！」

「俺にはその概念、ちよつとよくわからないけどね……」

全知を極めた大賢者にも理解できないものが、世の中にはわずかながら残っている。

たとえばミリアというアホなお姉さんが、ノリだけで発する言葉だ。

「理屈じゃなくて魂で理解するんだよ！ ……こら、逃げるなブラザーっ!!」

ベッドから抜け出そうとするアルに、そうはさせじとミリアが絡みつき、二人はジタバタと暴れる。

「……よくわかりません。……家族以上に親しい人なんて今までいませんでしたから」

「えー、そんなの寂しいよ！」

アルを抱き締めながらミリアが言う。アルは力尽きてぐったりした。魔力で強化でもない、純粋な十二歳の体力ではミリアには敵わない。

「寂しい、ですか？ ……そうは感じていません。家族仲が良好ですから」

「友達と家族は別腹だよ！ どっちかでだけで満足なんてできないよ！」

「そういうものですか？ 私はそうとは感じていませんが……」

「俺はアリアとも友達になりたいと思っているけれど」

ミリアをぐいっと押し退けて、アルは言う。

「友達……、私が、アルと……？」

最初からそういうつもりで接しているのだ。オムライスで歓迎をしたのも。

「じゃあ私もアリアさんと友達になるっ！」

アリアはジトツとした目つきをミリアに向けた。

「……私から見たら、ミリアさんは何もしてないのに狙撃してきたり、そのまま殺し合ったり、晚餐に招かれた場でじろじろ威嚇したりしてきた危険人物なのですが……」

やっていることが完全に未開の蛮族だった。

言い訳の余地もないはずだが、ミリアはけらけらと笑い飛ばした。

「もう終わったことじゃん！ 昨日の敵は今日の友……むしろ戦ったからこそお互いの力をリスペクトしあえる真の友……ソウルフレンドだよっ!!」

ミリアはイエーイと親指を立てる。

「……それは一般的な価値観なのでしょうか？ どう反応すべきかわかりません……」
 「全然一般的じゃないから安心していいよ」

しかしアリアには馴れ馴れしいぐらいの接し方がちよūd良いとミーアは思ったのだから。そういう鼻が利く少女だ。そしてそれは、アルも同感だった。

「……こんなに他人と会話をしたのは、……久しぶりです」
 ぼつりとアリアが呟いた。

「それじゃあみんなでお風呂に入ろうよ！ アリアさんもアルくんも！ わー、アルくんと一緒に入るの久しぶりだなあ！ アリアさんも一緒にいいよね!？」

「……構いませんが。では行きましょう……アル」

「お、俺は一人で入るからいいっ！」

アルは一人で湯に浸かったが、やっぱり一緒に入ればよかったと後悔したりもした。

+

それにしてもずいぶんと発展したものだ。

翠朝。街の大通りを歩いて、アルは改めて感心した。

アメリカ魔術王国はアルベルトとルシアーナの故郷でもある。

三百年前は小国だったが、今や世界の中心といっても過言ではない。

「アルくんアルくん、あの屋台のお肉美味しそう！ お肉食べたい!! お肉!!」

ミーアがだれを垂らしそうな顔で袖を引っ張ってくる。

エテルメギアへと続く大通りには市場や商店が並び、大いに賑わっていた。

冷却魔術や輸送技術が発達した恩恵で、三百年前には見られなかったような食べ物が世界中から集まってきた。

「お金ならあるけど食べたらきつと後悔するよ」

「うにゃー」

肉なら何でも良さそうな顔をしているが、ミーアはアルの料理に慣れているから実のところ舌が肥えている。食べたら食べたで絶対に文句を言うだろう。

「……やめておいた方がいいでしょう。しよせん屋台料理です……。アルのオムライスを超える料理は残念ながらこの国には存在しません……」

街を案内してくれているアリアが言う。

そんなにオムライスを気に入ってくれたのだろうか。

とはいえしかし。目覚ましい発展ぶりではあるが……。

食べ物の鮮度^{せんど}を保つ冷蔵魔術にしても、通りを行き交^かう魔導補助馬車にしても……、使われている魔術のチグハグさが、目に付くたびに気になって仕方がない。ひどく中途半端な『作りかけ』なのに、これで完成品とばかりに実用化されている。もうちょっとの工夫^{くふう}でがつつり効率化できるのだが……改善しようという気は起きないのだろうか？

学院都市エーテルブルグは魔術研究の中心地でもあるはずだが……。

見上げると、エーテルメギア勇者学院は街の中心に王城のごとくそびえ立っている。

この日は入学試験当日。

アルとミーアは、それを受験しにやってきたのだった。

「私は試験を受けないので……、案内できるのはここまでです……」

エーテルメギアの校門までたどり着くと、アリアはそう言って足を止めた。

「見送ってくれてありがとう。合格してくるから、改めて友達としてよろしく」

アリアは目をしばたかせたが、こくりと素直^{すなお}に頷^{うなず}いた。

「……はい。よろしく願います……」

ちよつとは心を開いてくれているのだろうか？

さて。アルとミーアは巨大な校門^{きょだい}に向き合った。

校門というよりまるで城門^{じょうもん}のようだ。学院というよりも、城塞^{じょうさい}のようだ。

事実、エーテルメギア勇者学院は街の住民をすべて収容して籠城^{ろうじょう}することも可能な『戦闘教育拠点^{せんとうきょうこ}』なのである。

もし魔族の大軍が押し寄せてきても、容易^{たやす}く陥落^{かんらく}することはないだろう。

それだけ全人類にとって重要な場所なのだ。

緊張^{きんちやう}するな、アルくん！ 緊張するね、アルくん！

「俺は別に緊張しないよ」

「アルくんも一緒に緊張しようよっつ!!」

ミーアがアルの肩^{かた}をぐいぐい揺^ゆすつてくる。しかし緊張しろと言われても、すべてを知

り尽くした大賢者が試験などに緊張するはずがない。

おまけにこの世界の魔術は、何故^{なぜ}かどれもこれも過去の自分の研究のコピーなのだ。

完成しているようなものはひとつもない……。

アリアからもらった受験票を門番に示し、二人は校門を通り抜けた。

広場にはすでに数千人にもものぼるであろう受験者たちが集まっていた。

勇者学院とはいっても、この数千人の中に勇者がいるという保証はない。

しかし勇者に目覚めなかったとしても、彼らの非凡な才能が無駄になるわけではない。

この学院で英才教育を受けた戦士や魔術師たちは、『英雄』として勇者を支える存在となるのだ。かつての大賢者アルベルトのように。

アルは広場の一角が、ざわざわと騒がしいことに気がついた。

「な～んで榮譽あるエーテルメギアの試験会場に耳長どもがいるんだよお！」

「試験前で血が騒いでるつてのに、おまえら腰抜けと一緒に空気を吸つてると腑抜けが移つてきちまいそうだぜ！」

「無礼な！ 出身国や人種に文句を言われる筋合いはない！ 我々は受験資格を満たしてここにいる！」

「条件を満たしたからつてノコノコ平地に顔を出してくるんじゃないやねーよ、バーカ！ 勘違

いすんな！ 森に引っこんでろ!!」

「……私たちはこの場に恥じない実力を身につけてやってきたつもりです」

「それが勘違いだつてんだよ、先天的に劣つてるザコエルフどもが!!」

二人の耳が長い少女を、男たちが取り囲んで罵声を浴びせかけていた。

エルフか……。

争いを好まない温厚な異人種だ。テリトリである森に踏みこまれない限り、彼らは自分たちから戦いに打つて出ることはしない。

ゆえに戦闘にまつわる技術や理論は、戦争好きなノーマルが発展させてきた。

最初に魔術を編み出したのはエルフだったが、それ以降は……。

術式による【詠唱簡略化】、集団で魔力を同調させる【合唱魔術】、魔力を肉体や武器にまとわせる【魔闘技】……などといった近代的な戦闘技術のほとんどは、ノーマルの手によつて生み出されてきた。

ゆえにエルフのことを見下すノーマルは多い。

エルフは戦い下手で弱い、生まれつき闘争心が欠如している……などといった具合に。しかしそんな全体的な傾向や歴史は、個人の意思や努力とは関係がない。エルフにだっていろんなやつがいる。

むしろ彼らは魔力と寿命に長けている。やる気のあるやつが近代技術を取り入れて本気で鍛えたら、ノーマルよりずっと優れた戦士や魔術師になれるだろう。

「ふん、おまえらエルフは俺たちノーマルの英雄が守つてやる！ だからおまえらはせいぜい貢ぎ物を差し出して、俺たちに尽くしていればいいんだよ！」

「それがおまえらの『生まれつきの役割』なんだ！」

「それは不当な決めつけだ！ 我らだって英雄にも勇者にもなれる！」

エルフの少女が悔しげに声をあげる。

ひどいものだ。三百年も経ったらエルフたちの潜在能力の高さがもって世間に浸透しているものかと思っていたが……。

「不当なもんかよ！ 事実、三百年前の勇魔大戦でもエルフどもは何の貢献もしなかった！ 勇者ルシアーナは十三人のパーティーの中に一人もエルフを選ばなかった！ 貴様らは人種的に劣ってるって、他ならぬルシアーナ様が証明したんだ！」

あつ……と、アルは思った。それはある意味、自分とルシアーナの責任だ。

ルシアーナは魔界に突入するパーティーを組むとき、完全実力主義でメンバーを選んだ。当時、エルフたちの中にも英雄と呼ばれるに相応しい大魔術師がいた。

しかしルシアーナの隣にはすでに、大賢者アルベルトがいたのである。

役割被りであった。あらゆる系統の魔術を使いこなせる世界最高の賢者がすでにパーティーにいたため、ルシアーナのパーティーにはもう魔術師が必要なかった。

そういう事情があつたのだが……。

勇魔大戦で活躍する英雄を生んだ国は、『人類の勝利に貢献した』として、特権的な地

位を得ることとなる。

かつては弱小国だったアメリカ魔術王国が【人類世界同盟】の盟主として君臨するようになったのも、勇者ルシアーナと賢者アルベルトの出身国だったためだ。

逆に何の貢献もできなかった国は立場を失い、冷遇されるようになる……。

ノーマルのアルベルトが、生まれつき魔力に長けているはずのエルフの大魔術師を蹴落とした結果、エルフたちの名誉は地に落ちた……というこのようだ。

「だからこそ今度の勇魔大戦で名誉挽回をするべくここにいるのだろう！」

「名誉挽回はそっちの都合だろうが！ こっちは劣等種なんざ必要としてねえんだよ！」

「ひゃっひゃっひゃ！ 勘違いしてねえでとつと森に帰れ！」

だが三百年も経っていまだに差別の大義名分にされてしまつては困るな……。

彼らの差別思想はもはや実力主義とは完全に真逆のものだ。

「……いいよ、エステラ。試験さえ受けられれば、何を言われても」

「カティ！ しかしこのような侮辱を受けて黙っていられるものか！」

カティと呼ばれたエルフの少女は、静かに俯いて侮辱に耐えていた。

エルフの伝統衣装に身を包む、華奢で儂げな少女だ。

エステラと呼ばれたエルフの少女が、カティを庇うように男たちと言いつ争っている。

こちらは重厚な鎧に身を包んだ、凛々しい顔つきの女騎士だ。
「……へっ、耳長のくせに、実力には自信ありますってツラじゃねえか」

男たちの中から、ずいっと一人が前に出た。
「いいぜ、だったらこの場で俺が劣等種どもの実力を審査してやる！ さあ、かかってこいよ！ 相手してやるぜ!!」

「何を言っているのですか？」カティは蔑んだ目つきで言った。

「受験生同士の私闘は禁じられています。私たちは公正な試験で競い合うべきです」

「そうでなかったら、貴様らと口論などせずとうに斬っている」

男はひやひやひや！と下品に笑い飛ばした。

「俺を誰だと思って口をきいてんだあ!? 俺はタルガス・フォン・アルザーヌ！ 俺の親父はアメリカの軍務卿だぞ！ この学院だって親父の管轄だ！ たった今から俺が試験官に代わって劣等エルフを叩きだしても、誰も文句をつけやしねえよ！」

タルガスはにたりと下衆な笑みを浮かべた。

「……おまえらが俺に手出ししたら、おまえらは私闘をしたことになるかもしれねえけどな」

「なっ!？」

つまり一方的に叩きのめされろということだ。

「流石タルガスさん！」

「ひやつひやつひゃ！ 今日ここでエルフを見かけたらこうして叩きだしてやるって決めてたんだ!! てめえら劣等種が認められる日なんて、未来永劫こねえよ!!」

……なるほど。合点がいった。

彼らはエルフの潜在能力に気付いているからこそ、差別をやめないのだ。

タルガスは背中に負った大剣を手に取り、ゆっくりと振り上げた。

「……ルシアーナ様とアルベルト様を恨むんだなあ！」

「アルくん！ 何なのあいつ、信じられない！ こんな許せないよ!!」

ミアは憤然と声をあげて、背中の弓に手をかけた。

「やめなよ、私闘は禁じられてるって言ってたじゃない。手出ししたら失格になる」

「そんな……アルくんは放っておくつもりなの!？」

「俺が何とかするから、ミア姉はやめなよってことだよ」

「さっすがアルくん！ でも、どうするの?」

さて、どうしよう。

私闘の痕跡を一切残さずエルフの二人を助け、タルガスをこらしめる。
……これはわりと面倒な状況だ。アルも不合格にはなりたくない。
一番手取り早いのは精神操作だが……たとえ相手がクズでも人の心を操ったりするのは好きではない。人の心は聖域だ。

しかしタルガスという男は相当に人格が腐っているから、相応に痛めつけてやらないと彼自身のためにもならないだろう。となると……。

アルは思考を巡らせつつ、てくてくと無造作に歩いて行っただ。

「とつと森に帰っちゃまえ！ 食らえ、魔闘技……オーラブレイドッ!!」
タルガスは幅広の大剣に魔力を帯びさせて、カティへと振り下ろした。

——その両者の間に、素早く割って入った小さな影がある。

「なっ!？」

年少の少年が、振り下ろされた大剣の刃を無造作につかんでいた。

タルガスが押しても引いても、小さな手に阻まれた刃は動かない。

「……今、オーラブレイド、って言った？ この無様な技を？」

アルは小枝を拾い上げるように、ひょいとタルガスから大剣を奪い取った。

「魔力制御の精度が甘い。余計なところに魔力が分散している。本当のオーラブレイドと
いうのは……こうだよ」

アルは奪い取った大剣をゆつくりと振りかざす。

その小さな体から莫大な魔力が湧き上がり、そのすべてが刃にぎゅっと集中した。

——広場にいた数千人の受験生が一斉に振り向き、震え上がった。

アルが掲げた大剣から、非常識なまでの魔力の波動を感じ取ったためだ。

その魔力をそのまま地面に叩きつけたら……エーテルメギアを中心にエーテルブルグと
いう街そのものが一刀両断されるだろう……そう予感させるほどの魔力波だった。

恐怖と緊張感で、広場が凍り付いた。

——しかしそれでもアルは手加減をしていた。

……あまり強い力を見せつけすぎても、やる気を失うかもしれないからな。

これぐらいの力を見せれば、彼の思い上がりを正すのに十分だろうか。

「お……おまえ、な、なんだ、それ……」

膨大な魔力がこもった刃の真下にいるタルガスが、ガタガタと歯の根を震わせた。

「何だそれ、だって？ これは一撃の威力を最大限に高めることを追求した魔闘技だよ。

でもこれは不完全だ。次に何をするか、動きが読みやすいからね」

やれやれ……自慢げに繰り出す技がオーラブレイドとは。

もしかして魔術だけじゃなくて武術も『出来損ない』ばかりなのか？

「そ、そんなことは聞いてない!? お、おまえ、それで何をするつもりだ!」

「あなたに振り下ろすつもりだけど」

「や、やめろ!! 俺は軍務卿の息子、タルガス・フォン・アルザーヌだぞ!!」

「知らないな。確かに勇者ルシアーナはエルフをパーティーに選ばなかった。だけど彼女はあなたが何者かなんてことにも興味はなかったはずだ。大事なものは……」

「お、おまえ試験に合格したいんだろ!? わかってるのか!? 俺に手出ししたら不合格になるんだぞ!! 俺はタルガス・フォン・アルザーヌなんだ!!」

「……大事なのは、個人の實力だよ。名前じゃあない。どんなに速い一撃でも動きとタイミングを読めればかわせるものだよ。名前なんかは頼らず、チャレンジしてごらん」

アルは剣を振り下ろした。

魔力で守らねば鼓膜が破れるほどの轟音が巻き起こり、地面に巨大な亀裂が穿たれた。ぐらぐらと大地が揺れ、エーテルメギア勇者学院がガラガラと崩れてゆく。

人々は悲鳴をあげて逃げ惑った。

タルガスは跡形もなく消滅していた。

真つ二つになっただけでは済まず、剣圧の余波で消し飛んだのだ。

……これでは回避できても助かる術はなかったか。ちよつとやりすぎたな。

肉体を失ったタルガスの魂がふわりと浮き上がり、生命の大本へと回帰してゆく……。

「……時間・反転跳躍」

アルの背に銀色の術式が浮かび上がった。

発動した大魔術は、時の流れを逆向きに押し流していく――。

——アルがタルガスの大剣を片手で受け止めている時点まで、時間が逆流した。時間操作魔術。

世界の理をすべて知り尽くした魔術の中でも、究極クラスのもののひとつ。

ただし神かギフトの力を借りない限り、人の力で操作できる時間は数分が限界だ。

そしてアルはちよつとした細工を施していた。

自分だけでなく、タルガスの自我も巻き戻しの効果から外しておいたのだ。

すなわち術者のアルだけでなく、タルガスの記憶もそのままだった。

タルガスの顔面が青ざめ、滝のような脂汗がぶわつと溢れ出た。

「お、おまままえ……いい、いいいい今俺になな何を……!」

これで彼も謙虚な心を取り戻してくれただろうか？

「いいかい、あなたがどんなに偉い人の息子だろうとそんなことで思い上がってはいけないよ。相手がエルフというだけで、何も知らない他人を見下してもいけない」

アルはぐっと拳を握り締めて、諭した。

「何故なら誰もが努力次第で、どこまでも強くなれる可能性を持っているのだから！」
へにやりとタルガスはその場でへたりこみ、白目を剥いて気絶した。
なんだ、だらしがないな。

理解してもらえらるまで繰り返そうと思っていたのに。

ちよつと走馬灯を見せられたぐらいで、何も気絶することはないだろう。

……だが目的は果たせたから、よしとしよう。

彼も反省したに違いないし、エルフの少女たちを助けることもできた。

「タ、タルガスさん!? タルガスさあーん!!」

男たちがタルガスを取り囲んでいく。

「君、今……何をしたんだ？ 私たちを助けてくれたのか？」

鎧を着こんだエルフの少女、エステラが呆然とした声を漏らす。

彼女たちからしたら何が起こったのか、わけがわかるまい。

アルがそちらを振り向くと、

「……なにっ!? き、君は！」と、エステラが驚きの声をあげた。

「きゃ、きゃわいい……♡ こんな小っちゃかわいい男の子が、我々を助けてくれたというのか!？」

女騎士の凍々しい顔が、ふにやりと緩んだ。

「エステラ、失礼ですよ。……助けてくださってありがとうございます」

カティの方はあくまで礼節を乱さずに頭を下げた。

清楚な美貌と華奢な体軀。気品に満ちた物腰は、まるで高貴な生まれの姫のよう……。

「私はカティ・フィオーレ。エルブンハイムの第四王女です」

……本物のお姫様だった。アルは少しだけ驚いた。

「私はエルブンハイムの聖騎士エステラ・ブリランテだ。カティは私にとって幼馴染みの友であり、相棒であり、守るべき主でもある。ありがとう、少年」

エステラはキリつと表情を引き締めてそう自己紹介した。

しかし中腰になってアルと目線を合わせると、すぐにまた表情をデレデレにさせた。

「き、君はどうしてこんなところにいるのかな？ 父上と母上からはぐれて迷子になって

しまったのかな？ きゃ、きゃわいいな〜っ♡」

……迷子がエーテルメギアの試験会場に迷いこむわけないだろう。

見た目だけで子供あつかいというのもいい加減にして欲しいものだ。大賢者だぞ。

「俺の名前はアルフレッド・マグナス。もしも二人が正規の試験ならば合格できるというなら、きつと同級生ということになる。よろしく」

「なに、君は飛び級生なのか!? 同級生とは、驚いたな……」

「まともな試験ならば、自信はあります!」

カティはぐつと身を乗り出して言う。

……誤解されては困るから、言っておかねばなるまい。

「勇者ルシアーナは実力主義者ではあっても、差別主義者ではなかった。彼女のパーティー選びのせいでエルフへの差別が後を引いたのは残念なことだけど……だからこそあなたたち二人は、今この場で実力を正當に評価されるべきだと思う」

「……君はまるで、当事者のような言い方をするのだな」

エステラが面食らったような顔をした。当事者だぞ。

「ありがとうございます。勇者ルシアーナ様は、私たちを差別していたわけじゃない……誰かがそう認めてくれるのを、ずっと待っていました」

カティはアルの小さな手をぎゅつと握り締めた。

アルはぎょつとした。カティの白魚のようにたおやかな手は……、

武器を操作する薬指と小指の付け根だけ、皮膚が異様に分厚くなっていた。

魔力で肉体を保護強化していれば、このような状態は見られない。つまりこれは――、

魔力が尽き果てて体がボロボロになるような鍛錬を日常的に積んでいる人間の手だ。かつての自分と同レベルで努力している人間を、初めて見たな。

「今日ここで心が屈しかけたこと……恥ずかしく思います。しかしあなたやルシアーナ様のような方が見守っていてくださるならば、私はもう二度と屈しません!」

闘争心とやる気に満ち溢れたエルフ……。

そのとき朗々とした声が広場に響き渡った。

「静粛に! これよりローディシア大陸の命運を担う名誉ある勇者候補たちの選抜試験をはじめ。攻撃力測定、筆記試験、模擬戦の三種目によって諸君らの現時点での能力と将来性を測らせてもらう。それでは試験番号一から五百のものはこちらへ……」

「……はじまるようですね。今日のご恩は忘れません。お互い頑張りましょう!」

「ああ、頑張ろう」

改めて手をぎゅつと握り合ってから、アルはミリアの元へと戻っていく。

「さっすが私のアルくん！ 説教だけで相手を気絶させるなんてっ！」

——悪くない出会いだっただけだ。

アルは会話しながら二人の魂を鑑定していた。

カティがレベル72、エステラが70。そして二人とも、ギフト持ちだった。

有能なギフト持ちは、きちんとチェックしておかねばならない。

+

「試験番号一から五百の受験生は第一闘技場へと集合！」

そこには五人の試験官が待ち構えていた。

「これより攻撃力測定を行う！ ルールは簡単だ。我々が生み出す結界に、誰でも好きなやつから自由に攻撃を仕掛けるがいい!!」

なるほど。結界の損耗率でこちらの攻撃力を測るというわけか。

「中位旋風斬！」

「上位火炎弾！」

すぐさま受験生たちが、意気盛んに微笑ましい攻撃魔術を仕掛けていく。

それらは五人がかりの結界の前に、螳螂の斧のごとく弾き返されていった。

しかし結界を張ることを専門としている魔術師を結界師と呼ぶが……。

「たった五人で大丈夫なのかな？」

守る側は攻める側よりも多くのエネルギーがいる。並の結界師五人では、本当に一騎当千クラスの英雄の一撃を受けたらひとたまりも無く砕け散ってしまうだろう。

勇者学院なら、そういう規格外の受験生も想定していなければダメだ。

「何をバカなことを！」

結界師の一人が、アルの言葉に耳ざとく反応した。

「ここにおられる方は、当世一代の結界師エイブラハム・ピッケンバーグ十三世殿であるぞ！ 学生の試験においてになるなどとても恐れ多い御方だが、こたびの入学試験は天才と名高いルーク殿下も参加なさることから特別におでましいただけたのだ！」

ほほう、ピッケンバーグ家といえば結界魔術を専門に研究し続けている名門だ。

タルガスのアルザーナ家なんぞはまったく聞いたことがなかったが、『ピッケンバーグの鉄壁』といえは三百年前からその名が知れ渡っていた。

結界魔術に限って言えば、賢者アルベルトよりも上手だっただろう。

当時のピッケンバーグは防衛拠点を守り続けていたから肩を並べて共に戦った経験はないが……まさしく人類の守護者と称えるべき傑物だった。

この時代の『ピッケンバーグの鉄壁』がどのように進歩しているかは、興味深い。「ぬしらのごとき若輩が、儂の鉄壁に不足を申し立てるなど……笑止!」鶴のようにひよりと痩せた老師がしやがれ声でそう叫ぶ。

この老魔術師こそエイブラハム・ピッケンバーグ十三世で間違いあるまい。

「毛の一筋でも結界に傷をつけられたら、褒美をくれてやるわ!!」

「褒美って何?」

「儂のサインをやるう!!」

ちよっとだけ欲しいな……。

当時のピッケンバーグさんを、本当に尊敬していたから……。

「あの『ピッケンバーグの鉄壁』に挑めるたあ、面白え! 男の見せどころだぜ!!」

ゴリラのような顔をした男子がずいっと前に出た。

とても十五歳とは思えぬ顔と体格であった。見るからに攻撃力が高そうだ。

「どりゃああああああああああっ! オーラブレイドおおおおおとおっ!!」

ゴリラ顔の男子は手にした戦斧に魔力を一点集中させて結界に飛びかかる。

これは……タルガスの無様なオーラブレイドの十倍は威力があるぞ!

「ぬるいわ! ……魔甲鉄壁陣!!」

エイブラハムが片手をかざして結界に魔力を注ぎこむ。

結界がもりもりと厚みを増していき、物理的な実体をもって戦斧の一撃を弾き返した。

「ぐわああああああああっ! こ、これがピッケンバーグの鉄壁……!!」

ゴリラ顔の男子が悲鳴をあげながら吹っ飛ばされる。

「こ、これが伝説の結界師の力……」「まるで要塞だ……」

受験生たちがざわつき、怖じ気づいたように攻撃が止まる。

「どうしたどうした小僧ども! 他に威勢のいい者はおらんのかあ!」

——妙だな……。今の術式は……ピッケンバーグ一族のものではない。

本気を出していないのか? 試してみるか……。

「極大紅蓮地獄」

アルは深紅の術式を浮かび上がらせ、渦巻く爆炎を撃ち放った。

「グ、極大格じゃと!? み、皆の衆よ、儂に魔力の波長を合わせよっ!!」

エイブラハムたちは顔色を変えて全魔力を結界に注ぎこんだ。

しかし浮かび上がる術式は、ピッケンバーグ本来のものではない。

アルがかつて時の牢獄で研究していた欠陥品を、そのままコピーした術式だ。

まさか……一族代々が研究し続けていた術式を捨ててしまったのか!?

爆炎は瞬く間に鉄壁を蒸発させ、五人の結界師たちを飲みこんでいった。

「『うっぎゃああああああああああああああっ!!』」

地獄の炎の中で悲鳴が響き渡る。

しまった、本気を出していないのかと思つて強くしすぎた。

それにサインが欲しかったから……ちよつとだけ気合が入りすぎてしまった。

いかにビッケンバーグの鉄壁といえど、今のアルにとっては薄紙一枚のようなものだ。結界は破壊しつつ相手を傷つけず……というような手加減は簡単なことではない。

「極大治癒魔術」アルはすぐさま治癒魔術を唱えた。

危うく消し飛びそうになっていた五人が、かろうじて原形を取り戻していく。

「極大格の攻撃魔術と回復魔術を……同時に?」

他の受験生たちが、ぼかーんとした顔でアルを見つめる。

それができるから賢者なのだ。

「バ、バカナ……儂の鉄壁が、あんな子供に………ウーン」

回復したエイブラハムは、しかし精神的なショックですぐに白目を剥いてぶつ倒れてしまった。試験官たちが慌てて彼を抱き上げて、どこかに運びこんでいく。

ちよつと待て、サインはちゃんとくれるんだろうな。

十

筆記試験が行われる教室にやつてきた。

着席すると、すぐさま分厚い紙束が配られてゆく。

設問の内容は魔術理論、武術理論、医術理論の三種類である。

これを半日かけて解いて、この日は一旦解散だという。

アルはしばし考えこんだ。

良い点を取ろうと考えるなら、この時代の水準に合わせた答えを書きこまねばならない。

しかし……試験の解答用紙とは、自身の知性の分身のようなものだ。

よし、『世界の理』の一端をここに記してやろっ。

アルは超高度魔術を唱えるための究極法則や、武術におけるもつとも効率的な運動力学、知られざる生命体の神秘について、手加減なく答案用紙を埋め尽くしていった。

そしてものの数分で終わらせて、真っ先に試験会場から退室した。

「なんだあいつ……?」「もう解き終えたのか?」「バカナ、単なるリタイアだろ……」

さて、この解答用紙の価値を理解できる者がいればいいのだが。

「ミア姉、どうだった？」

しばらく時間が経って、試験会場から退室してきたミアにアルは声をかけた。

「これまでアルくんから習ってきたとおりのことを書いてきたよ！」

ふむ、果たしてどうなるかな。

今日の試験で成績上位の者だけが、翌日の模擬戦に参加できるとのことだったが……。

「……アルくん、それ、どうしたの？」

アルが手にしている四角い色紙に、ミアが目を留める。

「ビッケンバーク師のサイン。ミア姉を待っている間にもらってきた」

「誰それ……？」

それから二人は宿に戻った。

十

翌朝早く、アルとミアは再びエーテルメギアにやってきた。

広場の掲示板に前日の試験の結果が貼り出されているはずだったが……。

しかしその前に、二人は別室に呼び出された。

「試験監督長のレストン・クーゲルだ」

いかにも研究者らしい細面の男が自己紹介する。そして、

「悪いが君たちの筆記試験の答案は、すべて0点とした」

ミアが「ええーっ!？」と大声をあげた。ふむ、そうだったか。

「君たちの解答には見るべきところがあるが……いずれも証明されていない、見たこともない理論に基づくものだ。二人とも攻撃力測定の結果が並外れて優秀だったから模擬戦への参加は認めるが、この解答を正解とするわけにはいかない」

アルはレストンをじっと覗きこんだ。

「な、何かね？」

少年の無垢な瞳に、レストンがたじろぐ。

「試したの？」

「……なに？」

「未知の理論を目にしたそのとき、まず最初にやるべきことはバツをつけることではないと思う。魔術の実証実験なんて、そんなに時間のかかることじゃないんだから」

「……み、未練がましいことを言ってゴネるな！」

レストンは突如として激昂した。

「私の採点に不満があるのか？ アメリア魔術王国はあらゆる理論の最先端だ！ 偉大な、

「我らが魔術王が定めた理論こそが、絶対の正解なのだ!!」

偉大なる我らが魔術王……?

「どこの馬の骨に師事したのか知らないが、得体の知れないものを持って来て試してみろなどと甘ったれたことを言うな! 自分の『学不足』を認めろ!!」

「本来どう答えるべきだったか、模範解答を見せてもらえるかな、レストンさん」

レストンは答案の中から一部を抜き出して、アルに渡した。

名前欄にはカティ・フィオーレとある。三科目とも百点満点だった。

やるじゃないか。アルは思わず微笑みを浮かべた。

しかし内容を一読して、顔をしかめた。

書かれていることのすべてが、自分が時の牢獄で体感三十億年ほど前に研究していた内容と気持ち悪いほどに合致する。間違っている箇所や、自分が名づけた固有名称に至るまで。

すべてが研究途中の試作品、あるいは失敗作だ。

研究を終えたかつてのアルが心のゴミ箱に捨てたはずのもの。

まるでゴミ箱を漁られたような気分だが……。

偉大な魔術王とやらがこれをもたらしたというのか?。

レストンの表情には、怒りだけではない感情が滲んでいた。

どこか居心地の悪そうな、苦渋の色。

アルに対する罪悪感……いや、真実に対する罪悪感か。

アルの答案を0点にすることに、彼自身が納得できていないのだ。

つまり彼は優れた『研究者』なのだろう。

アルの答案がより優れた理論だということを、直感できているのだ。

「……ちょうどこれから模擬戦をするんだったね。良かったらレストンさんに俺の試験官を担当してもらいたいな。俺はそこで自分の理論の正しさを証明したいと思う」

「なに……?」

「もしもあなたが真実を裏切ること罪悪感を覚えるなら、そうするべきだ」

彼は立場上、アルの理論を認めることができない。

それはアメリカ魔術王国、そして魔術王とやらの権威を揺るがすものだからだ。

しかし彼の研究者としての良心は、苛立ちを感じている。

ゆえにアルは彼を真実へと誘った。

「……自分の目で実際に見てみたいでしょ？」
レストンの瞳が、子供のようにうつすら輝いた。

それが好奇心の光だとアルにはわかる。
アルもまた四十六億年の大部分を魔術研究に費やした、筋金入りの研究者だからだ。

アルとミーアが広場に戻ってくると、ちょうど試験の結果が貼り出されたところだった。
次の模擬戦へと駒を進める者たちの受験番号がずらりと並んでいる。

それぞれの試験の成績上位者も公開されていた。

アルとミーアも人だかりに加わって、おや、と思った。

攻撃力測定

一位 ルーグ・ハルム・アメリア 100点

二位 アルフレッド・マグナス 95点

三位 ミーア・グリーンウッド 90点

点数は結界師たちの体感でつけている大雑把なものだろうが……、

ピッケンバーグの結界をブチ破ったのに、満点がつかないとは。

このルーグとかいうやつは結界師たちを皆殺しにでもしたのか？

筆記試験

一位 ルーグ・ハルム・アメリア 計300点

二位 カティ・フィオーレ 計297点

「アルくん、おかしくない？」と、ミーアが耳元で囁く。

そう、おかしい。先ほど三科目すべて百点というカティの答案を見たばかりなのだ。

そして一位はやはりルーグとかいう男だ。

アルは周囲のざわめきに耳を澄ませた。

「すげえ、流石ルーグ殿下だ！ 【三百年目の世代】で最強の十五歳！」

「しかも教育係にあの『魔術王』がついてるんだろ？」

「アメリアの王子にして、アメリア最高の英雄の弟子……まさにアメリアの誇りだ！」

「三歳の頃には、もう火炎魔術を使えたいぞ。人呼んで【神炎の貴公子】……」

「その異名が勇者に変わるのには、もう決まったようなもんだな……」

「攻撃力測定でビックケンバーグの鉄壁を破るのに成功したらしいぞ！」

「桁が違えよ……すべてにおいて……」

「ギフトも持っているって噂だぜ？」

そのとき、朗々とした声の人々のざわめきを切り裂いた。

「やめてくれたまえ、諸君！ 私はまだ何も為し遂げてはいない!! 伝説はまさにこれからはじまるのだから!!」

鮮やかな赤いマントを羽織った貴公子が、人混みを割って姿を現した。

……彼がルーグ・ハルム・アメリカと見て間違いないまい。

「いかに勇者が優れた存在であったとしても、一人で勇魔大戦を戦い抜くことなどできない。私には仲間が必要だ！ 共に学び、共に戦い抜こう、みんな!!」

受験生から大歓声が巻き起こった。

ルーグの視線がアルを捉えた——優雅な顔が、わずかに陰を帯びる。

「やあ、君が飛び級で試験に参加しているというシャングリ・ラの神童……アルフレッドくんだね？」

人々の注目がアルに集中する。アルは「うん」と、頷いた。

「君のような素晴らしい才能をこの学院に迎えることができて、アメリカ王家に名を連ね

る者として、そしていずれ勇者に目覚める者として光栄に思うよ」

周囲の人々が「なんて立派なんだ!」「流石殿下!」と喝采の声をあげた。

……今、何か立派なこと言ってたか？

「君も素晴らしい攻撃力の持ち主のようだね。君は……ギフトを持っているのかな？」

「いや」と、アルは首を振った。

「そうかそうか!」と、笑いながらルーグの口元がねじ曲がった。

読心魔術を使わずとも、歪んだ優越感が溢れ出たことがひと目でわかる。

「はっはっは! 君が勇者に選ばれることはまずないだろうが、伝え聞くところによると勇者ルシアーナを支えた賢者アルベルトもギフトを持たなかったという! 私と君もそのような関係になれたらいいな! 君がアルベルトで、私がルシアーナというわけだ。君も私の善き右腕となってくれることを願うよ!!」

「俺がアルベルトで……あなたがルシアーナ? ……ふっ」

アルは思わず噴き出した。

「……何がおかしい?」ルーグは目つきを陰しくした。

「静かに! これより模擬戦についての説明をする!」

大きく声を張り上げながら、試験監督長のレストンが広場にやってきた。

「掲示板に貼り出された受験番号に、AからHの記号が割り振られているのを確認してもらいたい。諸君らにはこれよりAからHの八つのグループに分かれてもらい、それぞれ別の闘技場に移動してもらう！」

アルは掲示板に目を向けた。それは奇妙なことだと思っていた。

——アルの受験番号には、AとHの記号が振られていなかったのだ。

「だがその前に……諸君らも知っての通り、この入学試験には第三王子であられるルーグ殿下も参加されておられる！そして自らの戦いぶりを皆に見てもらいたいとの殿下からのたつてのご要望で、ルールの確認もかねて公開試合を行うこととなった！」

周囲がざわついた。

「それ……みんなの前で殿下と戦わされるってことか!？」

「神炎の貴公子と!? 一発魔術を食らうだけで消し飛ぶぞ!？」

「冗談じゃない、そんなの公開処刑だ!！」

アルは自分の受験番号に記号が振られていなかった理由を察した。

「公開試合の組み合わせはルーグ殿下と……アルフレッド・マグナス!!」

レストンが苦々しい表情で、ルーグとアルの名を宣告した。

「アルフレッドくん、君は筆記試験は0点だったらしいじゃないか」

ルーグがアルの耳元に顔を寄せて囁いた。

何故知っているのかは、わざわざ問うまい。

アルはこの模擬戦で勝利しなければ、筆記試験での0点を挽回できないだろう。

ルーグは突如として獐猛な顔つきになった。

「おまえはここでサヨナラだ。……目障りなんだよ、クソガキ！消えろ!」

†

円形闘技場の中央で、アルとルーグが向かい合う。

大勢の受験生たちが、観客となってそれを取り囲んでいる。

「あの子……飛び級だつてよ。まだ十二歳らしいぜ」

「それで神炎の貴公子とやらされるなんて……可哀想に」

「自信ありげだが……自信をへし折られてトラウマとなるんだろうな……」

そんなにルーグという男は強いのか？

「アルフレッドさん!」

「アルフレッドくん、大丈夫なのか!？」

観客の中から、カティとエステラが心配そうに声をあげる。

アルは二人に手を振った。新鮮な感覚だ。

……心配してもらえないというのも、少し嬉しいものだ。

一方でミリアは腕組みをして、退屈そうに見守っている。

心配などカケラもしていないのだろう。それはそれで正しい。よくわかつている。

「どちらかが防御能力を喪失するか、ストップをかけられるまで戦い続けること。あらゆる武器の使用を許可し、ギフトも生命にかかわらないものに限って許可する」

審判役のレストンが、両者の間に立ってルールを告げた。

「ふふふ……俺は生まれたときからすべてを持つている男なんだよ」

観客には聞こえない低い声で、ルーグはせせら笑った。

「世界の中心アメリカの王子にして炎魔術の天才……そして世界最高の英雄『魔術王』の弟子でもある。さらにギフトも持っている……神の祝福を受けて生まれたんだ！」

魔術王とやらの弟子——果たしてどれほどのものか？

「それに比べておまえは……大陸の片隅のド田舎からやってきた野良犬だ！ ギフトを持たない能無しだ！ 何も持たないくせにかるうじて生まれてきた……生粋のゴミだ！」

ルーグは瞳をギラつかせ、口元を悪魔のように吊り上げた。

「いいか、飛び級だか何だか知らないが、間違っても自分を『特別』だなんて思うなよ？

この世界で特別なのはこの俺ひとり……俺こそが勇者だ!!」

「ねえ、レストンさん」

アルはルーグを無視してレストンに顔を向けた。

「俺は模擬戦で自分の理論を証明するって言ったけど……それを承知の上でこのカードを組んだんだよね？」

声をかけられたレストンはぎくりと身を震わせた。

この状況はルーグの押しつけたもので、彼の本意ではないのだろう。

「……彼、とても惨めな姿を晒すことになると思うけど……本当にいいんだね？」

無視をされたルーグは、満面に憤怒を煮えたぎらせた。

「……ほごくなよ、クソガキ」

——ルーグの額に真っ赤な紋章が浮かび上がり、全身から炎が噴き上がる。

……ほう、これは魔術ではないな。彼のギフトか。

「我がギフト【神炎の申し子】の力、思い知るがいい！ これこそが貴様のような生意気なガキも、邪悪なる魔王も、すべて焼き尽くす必滅の力だ!!」

アルは彼の魂を鑑定し、おや、と首を傾げた。

ルーグは『神炎の申し子』と口にしたが、それはアルの鑑定した結果と異なる。

もちろんアルの鑑定が間違っているはずはない。ということとは……。

「くくく……このギフトはあらゆる魔術を神の祝福によって威力を増幅させた火炎に変換する！ 我が炎は、賢者アルベルトが得意とした『極大紅蓮地獄』をも上回るのだ！」

「本当に？ それじゃあ試してみようか？」

「……世界最強、史上最強の炎を食らえッ!!」

ルীগは深紅の術式を浮かび上げ、両手を前に突き出した。

「祝福紅蓮地獄!!」

轟音とともに、巨大な爆炎がアルの矮軀を包みこむ――。

「……極大紅蓮地獄」

炎の内側で、アルも左手をかざして発動させた。

――魔王と戦った頃の力加減で、あの頃に得意としていた魔術を。

轟音が轟音を、爆炎が爆炎を引き裂いた。

……魔術王の弟子でも、使う術式はやっぱり『出来損ない』か。残念だ。

アルが生み出した炎はルীগが生み出した炎を容易く飲みこみ、その勢いを衰えさせることなくルীগへと襲いかかる。

「なっ!!」

短く悲鳴を漏らしたルীগの目前で、炎はからかうように踊ってから消え去った。

「極大紅蓮地獄」

今度は右手をかざし、また同じ魔術を発動させる。

アルの右手からさらに倍以上に巨大な爆炎が生み出され、ルীগに迫る。

果然と立ち尽くすルীগの目の前で、炎はすぐに掻き消えた。

どちらも寸止めだ。アルベルトが使っていた威力の『極大紅蓮地獄』なんて彼が食らったら、消し炭になってしまうからな。

「い、今あいっ……!!」

「グ、極大格を同時に、右手と左手とで連続で!!」

「極大格自体、初めて見たぞ!」

観客席から驚きの声があがる。……重要なのは、そこではないのだが。

「でもルীগ殿下もどうやったのかわからないが、炎をかき消したぜ!」

「……互角か！」

……恐ろしい誤解をして観客席が盛り上がっているが、まあ、どうでもいいか。大事なのはレストンだ。アルは彼に向き直った。

「レストンさん、二つの紅蓮地獄の違い、わかった？」

レストンは「あ、ああ」と頷いた。

最初に左手で発動させた紅蓮地獄は、この国で模範解答とされている『魔術王の術式』とやらで発動させたものだ。アルからすれば『不完全な出来損ない』だ。

次に右手で発動させた紅蓮地獄は、今のアルの『完成された術式』だ。レストンが唸った。

「……なんという効率性の差だ。術式の違いで、これほどの差が出るなんて……」

「三倍ほどの出力差がある。詠唱速度にはもっと差が出るんだけどね」

レストンの理解に満足してから、アルは対戦相手であるルークに向き直った。

「あなたはギフトの名前を間違えているよ。あなたのギフトの名前は、神炎の申し子なんかじゃない」

「な、なに……？」

アルは先ほどルークの魂を鑑定した。彼のレベルは68。物理攻撃と魔術の両方を鍛えた



万能タイプの能力値の持ち主だ。レベルから、相応の努力をしてきたこともわかる。

そして所有しているギフトは――。

「あなたのギフトの真の名前は【スレイブ・アグニ
常時発動タイプのギフト。】」

用いる魔術がすべて炎属性に変更され、その威力が増幅される。

「……冷静に考えてみなよ、そんな効果、祝福なわけがない。あらゆる魔術が火炎に変換されるなんて、不便ではないじゃないか。デメリットの方が大きいよ」

今までどうやって生活していたのか不思議なレベルだ。

彼は魔力で動作する生活用品――魔力灯や魔力トイレや魔力シャワーすら使うことができなはずだ。それらに魔力を注ぎこもうとしたら、燃やしてしまうから。

そんなものは神の祝福であるはずがない。呪いだ。

ルীগは言葉を失っていた。

「あなたはそのギフトのおかげで、子供の頃から強力な炎魔術を使いこなせて、天才と呼ばれてチャホヤされてきたんだろうね。だけど残念ながらそのギフトがあなたに与えたのは、増長と勘違いの二つでしかない」

アルはルীগを哀れんだ。自分のギフトを自分で鑑定することはできない。

彼は周囲から嘘の名称を教えられていたのだ。

王族である彼を傷つけまいとして、誰も真実を伝えてくれなかった。

そして彼は勘違いし、どこまでも果てしなく増長していった。

「炎しかあつかえない不自由な囚人が、その炎の強力さゆえに驕って他人を見下す……。あなたは炎だけでは解決できない事態に直面したとき、他人の助けを得られなければ何もできないというのに。それがあなたのギフトの真の姿だ」

「……バカな。俺は天才で、王子で、ギフト持ち……。あらゆるすべてから祝福されている存在……勇者のはずだ!!」

「勇者が、こんな悪意に満ちたギフトを授かるはずがない」

囚人と名付けられたこの皮肉なギフトは、使い手の人生を狂わせるために神の手でデザインされたとは思えない。神々らしく、実に悪趣味だ。

「あなたは誰かに介護してもらえないと力を発揮できない人だ。だから思い上がりを正して、他人との接し方をもう少し見直した方がいいよ」

「……ふざけるなァ!」

つい説教が口から出たアルに、ルীগは叫びながら腰から剣を抜いた。

「接近戦に持ちこめば、貴様のような子供などッ!」

……その判断は正しい。アルも肉体的には十二歳の子供なのだから。

「魔術理論の次は武術理論だね、レストンさん」

「ハアアッ！ オーラブレイド！」

ルীগが鋭く一步を踏みこんだ。

ルীগの魔力は足を踏み出した瞬間には足に、腰をひねった瞬間には腰に、腕を振り下ろすときには腕に集中していき——剣を振り下ろす瞬間にはすべて刃に集中した。

今日これまで見てきた中で、もともと洗練されたオーラブレイド。

しかしアルは内心でため息をつく。やれやれ……またオーラブレイドか。

「オーラブレイドよ、我が炎をまよえ……！」

ルীগの魔力が集中した剣が、呪炎の囚人の作用によって強力な炎に変換される。

「食らえッ……アグニブレイク！」

炎をまとった刃が、アルに振り下ろされる。

しかし剣が実際に動くより先に、アルはその軌道から身をかわしていた。

「くっ、ガキが！」

ルীগが刃を返して二の太刀、三の太刀を振るう。

しかしアルは実際に刃が振られるより先に身をかわしていく。

「な、何で当たらん！ 速く動いているわけでもないくせにッ!!」

「悪いけど……その技は未完成品だよ」

おいラブレイドも、アルが時の牢獄で生み出した魔闘技だった。

魔力を全身に満遍なく覆うのではなく、動きの要点や武器に集中させることで効率よく破壊力を高める——そうしたコンセプトで考え出したものである。

しかし時の牢獄で屍鬼たちと模擬戦闘を繰り返すうちに、致命的な弱点に気がついた。

「これから動かす場所にバカ正直に魔力を集中させるから、動きが全部読めるんだよ」

アルは左手に魔力を集中させた。

「むっ!」ルীগが慌てて防御を固める。

しかしアルは実際には左手を動かさず右側に回りこみ、ルীগを軽く小突いた。

「うぐっ!？」

「実戦ではこうやってフェイントを交えるだとか、工夫をしないとイケない」

「……工夫だと……!? バカな、これは魔術王から教わった戦い方だぞ！」

……魔術王とやらの程度が知れるな。

攻撃がかすりもしないルীগは、ぜえぜえと息を切らせながら後方に退いた。

「もしくは、こういう動きで相手の懐に入る」

そう言った瞬間、アルはルーグの目の前に飛びこんでいた。
「う、うわっ!？」と、ルーグは悲鳴をあげた。

「重心を一切ブレさせず、予備動作を限りなくゼロにして動く……これは東方の島国【イ
ズルビ皇国】に伝わる運歩法。その名も無影という」

時の牢獄で出会った英雄の一人——剣聖カナエ・リンザキから習った技だ。

「魔力を集中させるのは……懐に飛びこんだ瞬間だけだ!」

アルは魔力を右手にこめて、隙だらけのルーグの腹をぶん殴った。

もちろん手加減をしたつもりだったが……、

「がはあっ!？」

ずぼっと、アルの拳はルーグの腹部を貫通していた。

ルーグの顔面から血の気が失われ、真っ青になっていく。

「ごめん。きみの防御力が思ったより低かった。……極大治癒魔術」

腕を引き抜きながら、ルーグに治癒魔術をかけてやる。

「レストンさん。なんかみんなオーラブレイドを最高の魔闘技みたいに勘違いしているけど、あれは単品じゃ不完全なんだよ。ああいう『剛の技』は『柔の技』とミックスさせないと意味がない。……魔術王とやらはそれをわかっていないのかな?」

「な……なるほど」と、レストンは納得して頷く。

アルは確信を抱いた。

——魔術だけではない。魔闘技も、以前のアルの研究から盗み出したものを模倣している。名前、間違っている部分、足りない部分までもそっくりそのまま。

アルの古い研究を盗み出した何者かが、この世界で魔術王と名乗って君臨しているのだ。

まあ、そんなことは神を倒すというアルの目的とは、関係がないけれど。
やれやれ、妙な世界になったものだ。偽者が君臨する世界とはな。

「今、ルーグ殿下の腹に穴が開いてたぞ……?」

「これ……もしかしてルーグ殿下が好き放題に翻弄されているんじゃない?」
ついに観客も、状況を正しく理解しはじめた様子だった。

「……き、貴様、よくもこの俺に恥をかかせてくれたなあ……!」
ルーグの顔が羞恥で真っ赤に染まっていく。

これで彼も敗北を認め、人生観を改めてくれるだろうか?
アルはそう期待したが……ルーグはいっそう鬼気迫る顔つきになった。

「殺してやる!!」

その殺気にあてられたかのように、レストンが叫んだ。

「殿下！ まさか【禁術】をお使いになるつもりですか!？」

十

観客たちが水を打ったように静まりかえった。

「禁術？ 何、それ？」

アルだけが不思議そうに首を傾げる。

ルীগはくつくくくと不気味に笑い出した。

「禁術というのは……アメリカ王族だけに秘伝されてきた禁断の処刑魔術だ！ 公に研究がされていないから、対処手段が一切ない。そして詠唱は電光石火……絶対に逃げることはできない！」

へえ、とアルは興味をそそられた。

先程から自分の模倣ばかりを見せられて、いい加減にウンザリしている。

そこまでもつたいぶるなら、独自の何かを垣間見せて驚かせてくれるだろうか？

「くつくくく……しかもこの魔術を受けたものは、静かに息絶える。何が起ったのか、

死因が何なのか、第三者には一切わからない。この魔術で始末されたものは、『事故』として処理されるのだ……!」

……いったい何の魔術のことだろう。

アルの知らない魔術はもはや存在しないが、該当するものが思い当たらない。

「アメリカ王家はこの魔術を使い、数多の反逆者を裁判もせず処刑してきたのです！ これこそ王権の象徴、民衆の恐怖そのもの……!!」

レストンが震え声で言う。しかしアルの胸はますます期待にときめいた。

「殿下、いけません！ その少年を殺してしまつては……その少年は、この世界の未来そのものであるかもしれない!!」

「黙れ、レストン！ 世迷い言を!! この世界の未来は……この俺だ!!」

「いいから早く使つて見せてくれ」

アルはワクワクしながら言った。

「食らえ……そして死ねえ!!」

ルীগの背後に漆黒の術式が浮かび上がる。

アルは即座にそれを読み取った。これは……。

【滅殺信号】じゃないか！

「事故だよ。この人がやろうとしたことをそのままやり返したただけさ。まさかこんなこと

になるとは思っ
てなかつたなあ」

「そんな理屈^{りくつ}が王族に通じるはずが……」

やれやれ……それはそうだろうけど。

「レストンさん。そういえば俺は医術理論でも0点をつけられていたね。それじゃあ最後に一つ、とても大切なことを教えておこう。二度とこんな子供騙^{だま}しの魔術^{まじゅつ}に引っかからないように。……人の心臓は、電気の信号を受けて動いているんだ」

アルはルーグを蘇生してやって、闘技場^{とうぎ}のリングから出て行った。

まだ勝負ありの宣言はされていなかったが、誰^{だれ}も何も言わなかった。

その一試合で、アルの合格は認められた。

続きは、4月17日発売のファンタジア文庫で！

©Mitsuki Mihara, kakao lanthanum 2020